6 ［6話］10年記念のメッセージ

関門景観に関わる16名のみなさまにメッセージをいただきました。

質問１　関門景観を振り返って　　**質問２　あなたが思い描く関門景観の将来は**
質問３　将来の関門景観に向けて　　**質問４　さいごに応援メッセージ**　　**もしくは、自由記載**

関門景観審議会　会長　坂本　紘二　さん

1968年３月九州大学工学土木工学科卒業。1973年３月九州大学大学院工学研究科博士課程単位修得退学。1973年４月九州大学工学部土木工学科助手（道路工学研究室所属、土木計画学・土木技術史・技術論専攻）。
1995年４月下関市立大学経済学部教授（担当科目：環境、技術と資源、都市環境論）。2007年４月公立大学法人下関市立大学学長。2010年４月国立大学法人山口大学監事（現）。

事業者と行政や市民、専門家が話し合いを重ねながら、協力的に知恵や工夫を取り入れるやりとりのプロセスが最も重要

1　潮の流れのダイナミズム、途切れることなく行き交う多くの船、日差しで変化する水面と対岸の光景、それに闇に浮かぶ夜景、……その時その場で実に様々な表情を見せてくれる、海峡空間のその景観の素晴らしさは、この１０年間、段々と磨きがかかってきているように思う。
　同時に、沿岸近くにまとまりなく建てられて行く高層マンションが、その素晴らしさを壊しはしないか、と懸念や不安も生じている。

2　関門景観条例の趣旨をのみこむことのできる業者が増え、行政や市民や専門家のさまざまな要請に応じ、話し合いを重ねながら、協力的に知恵や工夫を取り入れるといったやりとりのプロセスが、これから先の関門景観にとって、最も重要だと思う。
　そのようなかかわりと想いのこもった多くのやり取りのプロセスが、ずっと先々まで物語として市民の間でもっと語り合われるようになれば、きっと関門景観、関門空間に一層磨きがかかるに違いない。

3　魅力的な関門景観を引き継いでいくために必要なこと、期待することは：
・より多くの人々がよりよい海峡空間の形に関心と興味を抱き、海峡空間への思いを語り合うようになること
・そのような両市民による語り合いや話し合いを通して、海峡空間の特に沿岸部の将来イメージが打ち出され、そのイメージの実現に向かって構築物が建てられるようになること
・海峡を囲む沿岸部のウォーターフロントがもっと長く広く開放され、多くの人々が水辺のどこからでも海峡の風景をより一層楽しめるようになること

4　これまでの取り組みが持続し、取り組み自体により一層磨きがかかるよう応援しよう。

関門景観審議会　委員　浅田　典生　さん

私は生活者・職能者として能動的に創造的に関われることを望んでいます

1　対岸下関は、スカイラインが山の稜線を超える矩形板状の建物が増えたことで背景が隠され、景観に奥行き感が乏しくなりました。一方門司港は、近年優れた感性や固有の歴史・文化を感じさせるものが退場し、匿名的な景観に変わりつつあります。関門の景観には、これまでつくり手、見守り手として関わりましたが、未だにまちの魅力を削いでゆく開発を止める有効な手立てを持ちえぬ状況に忸怩たる思いでいます。

2　徐々に水嵩が増すように今の傾向が進むでしょう。それを弱めるカギは居住系施設と公的インフラの対応にあると思われます。関門の将来は、「圧倒的な存在である海峡の自然景観を、各々固有の歴史的文化遺産を尊重した景観づくりをおこなった両岸のまちが彩る。その景観やまちづくりは、住民参加型であり、自然と人工物のバランスが程よく整えられており、書割的でなく奥深く感じられ美しい。」となればいいと思っています。

3　景観については誰もが担い手という認識が共有され、問題を自由闊達に理性的に語りあえる環境整備がなされることが大切です。でもそれは簡単にできることではなく、今はその途上ですから、守るため調整は必要です。余剰箱物の撤去、延命的修繕の機会も利用し、壁面量、高さ、色等の諸要素に密度を絡めて検討するとよいと考えています。又、新しい良質なものを見出し、趣のある景観に育ててゆくことでまちの歴史・文化的な厚みを増すことに努力することも必要です。これらのことに今後は職能者の力が必要とされねばなりません。その職能は生かされるべきですし、必要とされなければ自立する場を失います。私は生活者・職能者として能動的に創造的に関われることを望んでいます。

4　海峡を中心にした景観を、多くの人々が育み伝えてくれました。私たちはそれを更に豊かにして伝える為に力を合わせるべきです。関門は世界に類をみない自然とまちが一体的に感じられる良質な景観をつくり得る素質を備えている稀有なところなのです。

昭和57年頃より門司港で建築の設計を行っています。関門在住30年超となりました。
そのころの門司港はまだレトロで注目される前、趣はあるが廃れたまちの印象でした。
その後約10年を経て始まったレトロ事業で、まちはドラスティックに、創り変えられ今日の門司港となりました。
私がこの時期に居合わせ、まちつくりに関われたのは幸運であり、経験は財産となりました。
まちへの強い想いの源はここにあります。

編集・発行：関門景観協議会[下関市・北九州市]

[6話] 10年記念のメッセージ

関門景観審議会　委員　大坪　和子　さん

北九州市景観アドバイザー、佐世保市景観アドバイザーに約30年に亘って携わる。
平成２年色彩計画研究所設立。景観、建築、土木構造物色彩計画及びデザイン監理に携わる。大分自動車道景観設計、関門トンネル人道壁画デザイン、東田開発再開発景観設計、戸畑駅南口景観設計、国交省作業車デザイン、北九州市マンホール蓋デザイン等。

魅力的で住み心地の良いまちづくり、両市が連携して、関門景観をもっと大切にしていくことが出来たら素晴らしい

1　基本的なルールを守るという消極的な守りの姿勢であったと思う。壊れてしまったら、取り返しのつかない景観の大切さをもっともっと浸透させていかなければいけない。

2　積極的に景観を守り、つくり出すことをしていかなくてはいけない。行政で出来ること、たとえば、風致地区の見直し、遠景の景観、海から両岸を眺める景観、両岸から海を眺める景観、住民への心遣い、訪れる人への心遣い、心地良さ、どちらも大切である。

3　審議会という話し合いの場が出来たので、この１０年間、基本的なことを整理してきましたが、これからは積極的に魅力的な景観をつくり出していくように出来たら良いと思う。

4　魅力的で住み心地の良い街づくり、両市が連携して関門景観をもっともっと大切にしていくことが出来たら素晴らしいことと思う。１０年間、努力してきたことを基本として、さらなる飛躍を楽しみにいたします。

関門景観審議会　委員　河邊　政恵　さん

行政の縦割り組織を超え、関係する部局の活発な意思疎通とビジョン形成を実施し、官民が協力し合ったまちづくりの実現を願う

（株）リバー不動産
代表取締役社長
北九州市立大学法学部法律学科
卒業
大好きなわがまち北九州市の方々の、お役に立てる不動産業者を目指して日々精進。
現在、海上保安友の会七管支部監事、北九州市にぎわいづくり懇話会企画調整委員、北九州市スポーツ推進審議会委員、（公社）福岡県宅地建物取引業協会不動産相談員。所属団体：福岡経済同友会、（一社）北九州中小企業経営者協会、海上保安友の会、北九州ミズ210Ｂ会、北九州ゾンタクラブ、北九州ものづくり光継会。

関門景観条例１０周年によせて

私は門司で生まれ育ちました。朝に夕に、そして季節によってその表情を変える関門の景観は私の原風景であり、この上なく大切な宝物です。不動産業という職業柄、都市計画に関する法は身近ですが、関門景観条例が制定された当時、街並みが互いの景観として財産となっていることを認識し、下関市・北九州市の両市が共同して守るという取り組みを大変素晴らしいと思いましたし、市民の一人として誇らしく感じたことを覚えています。

北九州市に住む私は、日頃、対岸に広がる下関市のウォーターフロントを眺めています。特にライトアップされた夜は大変美しく、ロマンティックな下関の景観を多くの北九州市民が楽しまれていることでしょう。では、下関市民の方々は北九州市の景観をどのように感じているでしょうか。

都市は生きものです。長い年月とともに街は刻々と変化していきます。街並みが通りの数軒で構成されるわけではないように、海峡を挟む景観形成は両岸の都市が歩調をあわせ、共通の概念に沿ったまちづくりをする必要があります。

現在、北九州市沿岸エリア一帯は港湾法の臨港地区指定がなされているため、有効な土地利用の促進が充分に行われていないケースが見受けられます。北九州市都市計画マスタープランには、関門エリアのウォーターフロント部は「市街地臨海部の再生や街なか再生に向けて新たな土地利用を進める」と明記されています。しかしながら、順位を優先する法を管轄する部局と意見調整を重ねた上で、都市計画を行わなければ、それは実現性の薄いものでしかなく、市民が主体となって時流に沿ったまちづくりを実行することは困難です。５０年、１００年を見越し都市文化をどのように育て、継承していくのか。関門景観条例１０周年を節目に、より一層活発な意思疎通とビジョン形成を実施し、官民が協力し合いこれからのまちづくりを実現できればと切に願います。

関門の景観は、関門海峡を挟む双方市民の貴重な財産であるばかりでなく、海峡を船舶で通過する世界中の人びとのための景観でもあります。行政区を越えたエリア遺産の構築に期待しています。

[6話] 10年記念のメッセージ

関門景観審議会　委員　仲間　浩一　さん

のべ20年勤めた大学（東京工業大学および九州工業大学）では、地域計画・景観デザインの専門家として働きました。
さまざまな地域における公的計画の策定や公共空間のデザインに携わった経験や、自転車を使った地域体験のためのイベント運営の経験等を基盤として、大学を早期退職して「トレイルバックス」を2012年４月に設立。
現在は、平戸や四万十などの重要文化的景観選定地域でのツーリズム支援を中心に活動しています。

多様な生活が営まれる場へと、水際の姿をダイナミックに変えていく施策に、公民一体となって知恵を絞って取り組んで欲しい

景観づくりという活動は、建物や橋などの実際に目に見える環境のデザインをきちんと行っていく、という考えと、見えている景観に新しい解釈を生み出して、市民みんなが大切に思える価値を生み出していく、という考えとの、両方が同時に求められているものです。関門景観では、前者は都市計画や景観政策の法令、制度が相応に整っており、実務的なデザインアドバイスを行った実績も積み重ねられてきました。現状や従前の成果に穴が無いとは言いませんが、制度を改良しながら将来に向けて取り組んでゆく方向が、それなりにはっきりと見えていると思います。

一方、後者についてはどうでしょう。海峡を挟んだ門司と下関での、市民の皆さんの関門風景に対する思いや、この場所を舞台に経済活動を展開しておられる民間事業者の方々の関門海峡という場所に対する敬いは、日々深まっているでしょうか。努力を重ねておられる団体の方々や、関門景観の両市の施策にご理解下さる事業者の方も勿論少なくありませんが、私の目にはもう一つ厚みやつながりが足りず、また将来に向けた関門景観に関するビジョンについての議論も欠如しているように映ります。

これを解決するために、私は海峡に面した生活場所を増やし、そこでの体験の機会を増やすことが有効に働くと考えます。開放的で大作りな業務空間から、多様な生活が営まれる場へと、水際の姿をダイナミックに変えていくという施策に、公民一体となって知恵を絞って取り組んで欲しいと思います。共有できる強い価値やビジョンは、生活に根付いた体験の多様性があって初めて生まれてくるものです。関門景観を形作ってきた両市のエネルギーがまだ熱いうちにこそ、生活時間を水際に持ち込むという次なる展開をしたたかに企んでほしいと願っています。

関門景観審議会　委員　松下　美紀　さん

夜間景観を夕暮れから深夜までの時間軸で考える必要がある積極的なまちづくりのための光環境を忘れてはならない

1　関門景観では見る・見られるという関係性から相互の景観の調和と調整がこの１０年で進められてきました。建築物の高さや色彩、ボリュームそして夜の照明まで新しい建物が計画されるたびに検討がなされ、少しずつ美しい景観が整ってきました。歴史あるこの地域では新しいものと古いものが混在する面白さもあります。それぞれの場所にそこに合った色彩やサイン、照明が計画されて魅力あるたくさんの場所が増えてきたと思います。

2　個性ある建物や彫刻などの「点」としての視点、それを繋ぐ道路や橋などの「線」としての視点、そして海峡を観る関門の景色としての視点である「面」。点と線が繋がって面を形成しており、小さなものの集合が景色を創っています。景観を考えるときには、自分の窓明かりが美しい夜景を創っているという意識を持って頂けるようになっていってほしいと思います。

3　照明デザイナーとして関門景観の将来を描くとき、市民が散歩をしたり来訪者が散策したりと出歩く時間帯には、賑わいのある楽しい光が水際を彩り生活に潤いを与え、深夜には秩序ある安全の光がきちんと整備されているように、夜間景観を夕暮れから深夜までの時間軸で考える必要があると思っています。積極的なまちづくりのための光環境を忘れてはならないと考えています。

4　これからも照明デザイナーの視点を持って、昼だけでなく夜間も美しい景観を創る一助になるべく力を傾注していきたいと思います。夜間は昼間見せたくないものを闇に紛れさせて見えなくすることもできます。しかし、昼間の景観が素晴らしくなることで、より美しい夜間景観になると信じています。

それから、海峡のシンボルはそれを繋ぐ関門橋です。ぜひ、色彩や照明などのデザインを見直して、どこの国の橋にも負けない美しい関門橋が創出されることを期待しています。

1989年
松下美紀照明設計事務所を設立。
日本全国のプロジェクトへ参画し、重要文化財の照明デザイン、国立公園やまちの照明ガイドライン制作、教育施設、文化施設、医療施設、交通機関から商業施設まで幅広い分野の光環境を創出している。
1993年より、タイ、韓国、中国、台湾など福岡を中心に約3500km圏内のアジア諸国における照明デザインも数多く手掛ける。
また、照明デザインに関するアドバイザー、審議会委員、大学の講師を務める。

編集・発行：関門景観協議会[下関市・北九州市]

[6話] 10年記念のメッセージ

関門景観審議会　委員　森　邦恵　さん

下関市立大学経済学部准教授。
1975年北海道生まれ。北海道大学経済学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（経済学）。北海道大学経済学研究科助手を経て、現職。
専攻は、応用ミクロ経済分析。景観などの環境アメニティを経済学的に評価することをはじめ、様々な財・サービスの品質の価値を測定することを研究対象としている。

景観の価値を高めるためのインセンティブを人々に与えることを考えていきたい

1　私が下関市立大学に赴任して、８年がたとうとしています。出身の函館市と同規模の都市であり，また海峡に接している点には赴任当時から親しみを感じておりました。海峡景観に関して函館と大きく異なるのは、対岸との距離感や海が作り出す雰囲気ですね。初めて関門海峡を目にしたときは、海とは思えない幅の海峡を、船舶が所狭しと行き交う風景に大変驚きました。

3　景観の価値は、誰かが決められるものではありません。そこに暮らす、その時代に生きる人々が作りだすものでもあります。
　時の流れとともに、移り変わる部分もあるでしょう。古きと新しき、伝統と革新が共存し、長きにわたり人々が引き継いでいけるものであって欲しいと思います。

4　経済学の立場から、規制による負担感だけを人々に与えるのではなく、景観の価値を高めるためのインセンティブを人々に与えることを考えていきたいと思います。どのような風景がその先に待っているのか、楽しみにしています。

関門景観審議会　委員　吉光　純也　さん

広告物・サインが、インパクトを損なうことなく景観にマッチするものを目指すべきと教育の現場で学生に伝えることが自分の役割

1953年山口県生まれ
東京芸術大学卒
ライオン（株）パッケージデザイナー
山口大学教育学部助教授
山口情報芸術センター事業統括
東亜大学教授／副学長を経て
現在　東亜大学芸術学部／大学院デザイン専攻客員教授
元山口県美術展覧会運営委員会会長
元山口県文化振興財団理事
元山口国体常任委員／広報県民運動委員長
下関市くじらシンボルマーク審査副委員長　など

1　新築の建物に関しては、景観にマッチして、色彩など不自然な組み合わせで目立てば良いというようなものが少なくなって来ていると感じています。ただ、新築ではないものや小規模のもので、少し景観にそぐわない印象のものもあるのが残念です。
　これまで提案された事案に意見を伝える タイミングが結構遅く、また施工業者によっては企業方針とかで対応しようとしない姿勢の方もいて、この地区は景観に対する認識が違うということをもっと全国に啓蒙していくことが必要と思います。

2　景観に即した建物が増えることで、関門地区の景観がどのような個性を持ってくるのか楽しみです。この地域の個性とは、もっと永い歴史の中で築き上げるものだと思いますが、フィレンチェやパリ、京都などのように関門地区ならではの個性的で且つ活気のある景観が形成されることを夢見ています。

3　広告物・サイン関連に課題が残っています。デザインの世界では、個性を出すために奇抜さを求めてしまうことも多くあります。広告物・サイン関連が、インパクトを損なうことなく且つ景観にマッチするものを目指すべきということを、大学などの教育する現場で学生に伝えることが自分の役割かなと思います。

4　関係する人たちだけでなく、多くの住民などが参加して、関門地区の景観をどう形成したいのか共通の認識を持ってほしいと思います。商品開発の仕事をしていたとき、色彩や意匠にこだわりのある流通グループがあり、そこに出品するメーカーや利用する消費者にも誇りのようなものがありました。同様に、景観に優れた関門地区に住み仕事をすることがステータスになるような、他地域の見本になるような都市になってほしいと思います。

編集・発行：関門景観協議会[下関市・北九州市]

[6話] 10年記念のメッセージ

下関市デザイン委員会　会長　中園　眞人　さん

下関市景観審議会デザイン委員会会長
下関市都市計画審議会委員
山口大学大学院理工学研究科　教授
専門分野：建築計画学・建築設計

海峡の見える都市景観は大きく変貌している
将来の関門景観を見据えたビジョンとアクションが求められる

関門海峡は津軽海峡に比べ本土と九州の距離が極めて近接する独特の地理条件を有し、特に関門橋が架かる最狭部は潮の流れも速く、船舶の運航にも細心の注意が求められる。歴史的にも北前船の航路となり、海運・国防の要衝の地であり、島国日本の中でも重要な海峡としてその役割を果たしてきた。

海峡両岸には下関･門司の都市が形成され、海運･貿易･漁業の拠点として発展した歴史を有す。今日、両都市の機能は大きく変化したが、海峡両岸に広がるまちなみと関門橋は、日本有数の海峡都市の景観を形成している。

門司地区では門司港駅を核とする「門司レトロパーク」が整備され、下関市では「海響館・かもんワーフ･唐戸市場･海峡メッセ」等の一連のウォーターフロント整備がなされ、北九州・下関両市の観光拠点としても位置付けられており、その相乗効果は極めて大きいものがある。

近年下関・北九州両市はこうした海峡都市景観の魅力をさらに高めるため、協同して景観行政に取組んでおり、海峡花火大会を始めとする各種のイベントや景観形成ルールの協同作成、関門景観審議会・デザイン委員会等を通じた情報交換や景観行政に取組んでおり、自治体の枠を超えた注目すべき景観行政といえる。

一方関門海峡が有す景観の魅力は民間分譲マンション建設の適地ともなり、近年下関側を中心に海峡沿いに高層マンション建設が進行しており、海峡の見える都市景観は大きく変貌している。こうした動向のコントロールは景観法に基づく行政指導のみでは限界があり、今後は地区計画の策定や海峡景観を眺望する視点場の整備等、公共が主体となり取組める施策を展開し、中長期的観点から将来の関門景観を見据えたビジョンとアクションが求められる。

門司港まちなみづくり協議会　事務局長　城水　悦子　さん

美しい景観づくりには、
自然に対する謙虚な気持ち、歴史を尊重し他に配慮する心が必要

1　平成１４年の門司港レトロへの観光客数は約２１１万人、和布刈は１３３万人と報告されていますので、門司港地区はすでに立派な観光地として認知されつつありました。

その魅力が、関門海峡を挟んだこの美しい景観にあることを市民も行政も再認識し、その保全のために「関門景観条例」が制定されたと思います。

二つの市に共通する条例の制定は画期的なことでその後の地区指定と指針に従って、お互いのまちから見た景観に配慮する取り組みは関門連携の総合力を高め、まちづくりにかかわる私たちにとっても大きな拠り所となっています。

まちづくり団体「門司港レトロ倶楽部」の一員として様々な活動にかかわる中で、観光地として有名になり開発が進むことを喜ぶ反面、歴史的な建築物が壊され、マンションや駐車場、安易な商業ビルが造られ、派手な看板が目立つようになる等、良好なまちなみの保全に危機感を覚えるようになっていきました。

景観に配慮することが魅力を生み出すことだと、倶楽部の会員を中心に平成１６年から勉強会を始め、ウォッチングやワークショップを重ねながら平成１９年６月に約３０の団体が参加して「門司港まちなみづくり協議会」を設立しました。現在、景観講座の開催や建築や景観、歴史的建築物活用に関する相談窓口として専門委員がアドバイスを行っています。

協議会では独自の「景観ガイドライン」を作成しましたが、景観条例はその大きな手引きとなりました。

2　関門景観は二つのまちと海峡と、海峡を航行する船で形成する独自の景観です。この美しい財産をぜひ守っていきたいと思います。

3　美しい景観づくりには自然に対する謙虚な気持ち、歴史を尊重し他に配慮する心が必要です。協議会の活動も建築にかかわる仕事としてもその心を大切にしたいと思います。

4　「景観十年、風景百年、風土千年」という言葉があります。損なわれる運命にある風景を人間の叡智で美しく受け継ぎ、千年後には歴史や文化も含めた関門文化圏の風土となることを信じて…

北九州市出身。（株）洋建築計画事務所代表取締役。
NPO法人門司まちづくり21世紀の会理事、門司港レトロ倶楽部監事、門司港美術工芸研究所理事長等。
まちの50年後、100年後の姿を想像しながら、資源を活用し、品格を保ち、付加価値をつけるまちづくりに留意し、特に、質の高い文化や景観づくりは時間と人々の共感が必要と考え、門司港まちなみづくり協議会の活動を通して、美しい関門の景観と歴史的建築物に彩られた特色ある門司港の佇まいを守り育てたいと思っています。

編集・発行：関門景観協議会[下関市・北九州市]

[6話] 10年記念のメッセージ

公益社団法人　福岡県建築士会北九州地域会代表　開田　一博　さん

昭和19年５月17日　熊本県山鹿市生まれ。
昭和45年４月　新日本製鐵（株）（現新日鐵住金㈱）入社。八幡製鐵所配属。
以後、建築、土木施設の計画、設計、建設、維持管理及び社有地開発に従事。
平成８年２月～平成15年３月（株）新日鉄都市開発（現新日鉄興和不動産）へ転籍。
マンション、戸建て住宅の宅地開発、建築設計、建設、販売、アフターに従事。
平成19年５月～平成22年３月　北九州産業技術保存継承センター（KIGS）研究員。
平成22年５月～　社団法人福岡県建築士会副会長及び北九州支部支部長。
資格　工学博士、１級建築士など

魅力的な関門景観を追求していくためには、まず市民の認識をもっと高める必要があると思う

1　私は建築士会主催の関門景観ウォッチングという企画を通して関門景観と関わってきましたが、１０年近い継続活動の中から双方の市民の意識が確実に変化しているように感じています。それは今まで当然のように思っていた自分達の町の景観が、他に無いとても素晴らしい所と再認識し始めたことです。その市民意識の向上と共に、行政による制度、仕組みの制定もあって、街の風景も徐々にではありますが整備されつつあると思います。

　振り返ってみますと、双方の街をお互いに見て回るという単純な発想から、他の数名の建築士会メンバーとで発案したイベントが今日まで継続、かつ進化して、何らかの形で社会に貢献しているという現実に、喜びとここまで支えて頂いた人達への感謝、そして今後の継続を願う気持ちで一杯です。

2　関門海峡を挟む両市が一体となった町として認識されるような状況を将来の姿として思い描きます。それは例えばトルコのイスタンブールやハンガリーのブダペストのような街の形態が、機能的にも制度的にもとれないものかと考えます。そうすることで街の魅力は一層高まるものと思います。

3　魅力的な関門景観を追求していくためには、まず市民の認識をもっと高める必要があると思います。そのために行政及び一般団体や市民がどのような活動を行えばよいか、より真剣に検討し、自分達の問題として捉え、身近なところから行動に移していくことが重要と考えます。私は建築士会という団体の活動を通じて、この魅力的な関門景観の形成運動に関わっていく所存です。

4　国内はもとより、外国も何度か見て回った経験から、関門景観のように素晴らしい所はそうザラには無いと言えます。この価値観を皆が共有し、もっと広めていく努力が必要と痛感します。それには例えば学校教育や市民講座の場でのテーマ等が考えられます。特にこれから未来に進む若者達にこの推進を期待します。

社団法人　山口県建築士会下関支部長　松原　暁宏　さん

景観はテーマのある建物とその質によって誘導されることが望ましい

松原暁宏建築設計工房代表
建築設計・監理業
一級建築士
建築士会支部長
信条：健康で、美しい物以外は造らない。

景観づくり活動

　景観をより良くしていくには、より強い法令化と誘導・啓蒙・公共意識をヨーロッパ並に高める事が必要となる。兎に角、質の高い建物や環境以外は造らないぐらいの、意識がほしい。

　建築士会の地道な活動を続けることも、大切にしていきたい。

1　景観も経済状況により変遷するもので、民間企業の投資が少なく、官庁や関門景観への影響の多い集合住宅（マンション）により彩られて行ったように思います。

　下関の建築士会も北九州の士会と合同で、関門ウォッチング・セミナーの３回目（現在８回を終え）にマンションの景観への影響をテーマに取り上げた経緯がありました。

2　今の進行状態は余り変わらないと思う。景観条例の審査もその段階で認識されていることと現場での変更されていることは、審美的罰則規定の無い為、已むを得ないことと思います。

3　景観条例は主に色彩巾の制約による統一性に働いていますが、景観はテーマのある建物とその質によって誘導されることが望ましいと考えています。

4　例えばグランドホテルから見ると、陸橋を美しい橋に変えるとか、広いデッキ通路に変えること。秋田商会と隣の塾の建物の不調和を指導する。英国領事館と前の三角公園の一体庭園化する等。意識的に美的に変貌させる施策がほしい。

編集・発行：関門景観協議会[下関市・北九州市]

[6話] 10年記念のメッセージ

財団法人下関２１世紀協会　常任理事　原　和人　さん

（財）下関２１世紀協会　常任理事
山口県景観アドバイザー
（株）原工務店　取締役設計管理部長
一級建築士

人の営みが繋がり、これからの１０年、２０年先の具体的な目標を両市で創り共有していくことが、景観を創造すること

景観を創造する

世界に誇れる海峡、その財産を次代にどう残し、活かし、伝えていくか。制定１０年が経過して、その難しさに直面をしている。いや、直面をしていることを感じなくなってきている、というのが現実であろう。

それは、目標の中にある、守り、育て、創るという部分の具体的なアクションプログラムの欠如と、目標を達成するための人の力、人の思いの強さ、本気さが市民に伝わってこなかったということである。その結果、海峡の水際にマンションが乱立しても、海峡の景観を阻害していると感じることすら薄れてしまってきているのである。

自然の美しさと日本の節目の歴史を演出した舞台。そこでのものづくりは、偽物は創れない、いい加減な感性では造れない、そんな緊張感を常に両市、両市民が持ち続けていなければならない。そのためには、常に目標を達成するためにあらゆる多様な場面で景観形成の大切さを訴え続けなければならない。まちが機能していくための整備の中で、市民が日々の営みの中で、観光という視点の中で、市街地活性化という取り組みの中で、関門景観を守り、育て、創るために何が大切かを議論し訴えかけていくことが大切である。

我々が取り組んできた関門海峡花火も四半世紀を超え、関門景観を彩る一つの文化になってきたと自負している。想いを伝えていくことで人の力が結集され、継続し発展していく一つの事例である。関門景観条例も具体的に市民レベルで取り組める事例を提案し、継続していくことで景観形成の大切さを伝えていくことがこれからの課題である。花いっぱいの道が繋がり、自転車道が繋がり、祭りが繋がり、海峡の歴史の点が線でつながっていく。そんな人の営みが繋がりこれからの１０年、２０年先の具体的な目標を両市で創り共有していくことが、景観を創造することであり、今、大切なことではないだろうか。

ＮＰＯ法人門司赤煉瓦倶楽部　会員　市原　猛志　さん

一市民として、よい景観、問題となる標識や建造物について、より議論が深まっていけるよう提案・提言を行っていきたい

北九州市出身。
大学生の頃より近代化産業遺産の研究を行う。
九州産業大学景観研究センター、九州国際大学客員研究員・非常勤講師、ＮＰＯ法人北九州ＣＯＳＭＯＳクラブ理事等。
北九州をはじめ、九州地方の産業遺産についての現存状況やその特徴に関する研究等を多数行う他、門司港の料亭「三宜楼」や旧小倉警察署庁舎の保存活動を行う。
平成２５年４月より北九州市門司麦酒煉瓦館の館長に就任。

1　関門海峡の流れは悠久の時を刻むけれど、ここ１０年を振り返れば、両岸の町並みは大きく変わったように思う。歩いてみると、海峡プラザを歩く人たちは若者も多く、なるほど門司港レトロ事業の開業当初から比較すると、客層が若返ったのではないかと思う反面、肝心のレトロ事業を支える基盤となる近代建築は、確実にその姿を消していっている。その原因自体が皮肉にもレトロ事業の成功であるから、何とも言いようがない。

2　この関門海峡のこれからの１０年を考える際、両岸の連携は今後ますます大事になっていくだろう。互いの町並みの姿を見ることのできる関係は、「見られる」ことを意識させるには十分といえよう。マンションの建設など景観を取り巻く情勢は今後も厳しく、それに比べ景観条例それ自体は罰則規定を設けないなど、条件も整わない中、よりよい景観を望むことはなかなかに難しい。

3　将来統一感のとれた景観を維持・向上させていくためには、関門景観条例でガイドラインが示されている色彩の統一やスカイラインの確保など、徹底すべきことは数多い。景観法の制定や国の文化財行政のカテゴリで「重要文化的景観」が設けられるなど、景観に対する意識は年々高まっており、その中で官民が連携した統一感のとれた景観への取り組みは今後ますます必要となっている。私は一市民としてよい景観、問題となる標識や建造物について、より議論が深まっていけるよう提案・提言を行っていきたい。

4　関門海峡はふたつの自治体にまたがっており、統一した歩調をとることはどうしても難しい。しかしながら、「一衣帯水」という言葉もあるように同じ水の流れを見ている人間同士で協力し合っていかなければ、今後の成長も難しいといえよう。その中でひとりひとりが常に互いに見られることを意識しながら、新しいものを作る・守ることを創造的に行っていかなければならない。関門のこれからの情報発信に期待するばかりである。

編集・発行：関門景観協議会[下関市・北九州市]

[6話] 10年記念のメッセージ

藤本秀志デザイン事務所　代表　ふじもと　秀志　さん

イラストレーター・グラフィックデザイナー
'55年　山口県生まれ
'80年　第3回ＮＡＡＣ展［日本広告技術協議会］・（東京／銀座）
'95年「日本デザインコミッティー」選抜秀作展・（東京／銀座）
'95年　ＦＡＸポスターパリ展・（フランス／パリ）
'97年　世界遺産ポスター展［日本グラフィックデザイナー協会］・（日本／全国）
'99年　リトアニア「現代日本ポスター展」・（リトアニア／ヴィリニュス）
'02年　「ＩＷＣ国際捕鯨委員会」記念切手デザイン制作
'02年　日本（下関市）・トルコ（イスタンブール市）［姉妹都市締結30周年記念］記念壁画・版画制作
'03年　第37回ＳＤＡ賞地区デザイン賞［日本サインデザイン協会］
'04年　下関市・青島市（中国）「友好都市締結25周年記念」記念碑制作
'05年～'11年　個展・グループ展
'13年　どうぶつは地球家族展［東京グラフィックデザイナーズクラブ］・（東京／銀座）
［作品収録］
年鑑日本のグラフィックデザイン（講談社）、ＪＡＧＤＡ年鑑（六耀社）、ＴＨＥ　ＩＭＰＥＲＩＡＬ誌（英文誌）、日本クリエイターズ年鑑、リトアニアデザイン誌ｅｔｃ．
藤本秀志デザイン事務所代表・山口県下関市在住

素晴らしい関門の景観パノラマは、私にとって景観の宝
両市民のまちに対する誇りと愛着を深めつつ、色彩感覚の意識を高めて

1　全国的に都市景観への取り組み機運が高まる中、私が見る限り色彩の氾濫を抑えた落ち着きのある街並みに変わってきたように思います。

2　海峡を挟んだ素晴らしい関門の景観パノラマは海峡をテーマに風景版画の創作を続けている私にとって景観の宝と感じており、この素晴らしい景観の保全には両市民が色彩意識をもって是非、守っていって欲しいと希望します。ただ、鮮やかな色を抑制することのみが最善ではなく関門景観らしさを出した「個性ある美しい景観」の色彩づくりも必要かと思います。もちろん、都市景観は一定の色調に進めていくことは景観形成の推進においてとても重要と思いますが「わび・さび」を感じられる絵画のような街並があっても素敵ではないでしょうか。

3　歴史あるヨーロッパの町並が今も心地よいと思われるのは市民の町に対する特別な誇りと愛着ではないかと思います。今後、関門景観も両市民の町に対する誇りと愛着を深めつつ芸術とは異なる景観調和としての色彩感覚の意識を高めることが重要と思います。

4　普段見慣れた風景を改めて見直して素晴らしい景観とは何かを考えつつ、「市民・業者・市」の方々が「景観意識」を地道に継続していく事が将来の「美しい関門景観の形成」につながるのではないかと思います。

株式会社ヤマグチ　代表取締役　山口　仁　さん

両市は海峡で隔てられているのではなく、海峡で結ばれている
子孫から預かっている景観をそのまま返すのではなく、より美しく

関門のまちなみ

熊本出身の私にとって「関門」がごく身近な存在になったのは２５年前。妻の実家がある門司港で暮らすようになってからです。以来、まちの表情は大きく様変わりしましたが、海峡に沈む夕陽、海峡を渡る汐風など、どんなに時が流れようと変わらないものもあります。

関門海峡を挟んで対峙する下関市と北九州市。歴史の舞台にも度々登場し、それぞれ重要な役割を担ってきました。この本州と九州の二つのまちは、海峡の最も狭い所ではわずか６５０ｍしか離れていません。２００１年には「関門景観条例」が制定されるなど、二つのまちは一体となって景観づくりに取り組んできました。両市にとってかけがえのない財産である関門海峡をフラッグシップに、港町らしさを生かしたまちなみの整備が、今も着々と進んでいます。両市は海峡で隔てられているのではなく、海峡で結ばれている。この意識が、これからの関門景観を考えていく上で一つのキーワードになるような気がします。

「自然は先祖から譲り受けたものではなく、子孫から預かっているものだ」。ネイティブアメリカンに、こんな言葉が伝わっているそうです。これは関門の景観にも当てはまります。預かっている景観をそのまま子孫に返すのではなく、より美しい姿にして返したい。そのためには、変えてはいけないものを大切に守りながら、時代に合わせて人が手を加えていくことも必要になってくるでしょう。

関門の景観が子孫からの預かりものなら、まちなみは今を生きる私たちの足跡です。まちなみからは、そこで暮らす人々の温もりや息吹が感じられます。人の思いが、まちを創り、さらに景観を彩っていくのです。そう考えると、海峡を挟んで見合う両市の市民が、これからはただ見合うのではなく、同じ方向を見つめて協力し合っていくことがますます大切になってくると思います。

１００年後、私たちの子孫はどんな関門の景観を眺めているでしょうか。私たち一人ひとりの想像力と感性が今、問われています。

1951年生まれ。
多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業。
株式会社ヤマグチ代表取締役。
1995年より官民一体となったまちづくり団体「門司港レトロ倶楽部」において情報紙「レトロタイムズ」の編集長を15年間務める。
2012年、ロゴマーク、会社案内などを制作した「門司港サイロ株式会社」が第６回北九州市都市景観賞の［屋外広告デザイン賞］を受賞。
趣味は門司港の人やモノなど街の宝探し。

編集・発行：関門景観協議会[下関市・北九州市]